九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世大名による献上行為の儀礼化に関する研究

越坂，裕太

https://hdl.handle.net/2324/6787383

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	越坂　裕太
論　文　名	近世大名による献上行為の儀礼化に関する研究
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　福田　千鶴 副　査　九州大学　准教授　荒木　和憲 副　査　九州大学　准教授　岩﨑　義則 副　査　九州大学　講師　国分 航士 副　査　九州大学　教授　森平　雅彦 副　査　学習院女子大学　名誉教授　松尾 美惠子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、日本近世武家社会において、諸大名が徳川将軍に実施した献上行為が定式・定例化する過程を儀礼化として捉え、献上の全体構造を検討し、幕藩制下に献上が果たした歴史的意義を解明するものである。

序章では、研究史を整理し、問題の所在を明確化した。将軍と大名は石高制に基づき軍役を果たす主従関係のもとにあり、献上行為が間断なく実施された。そのうち、全国各地の産物献上に関する研究はあるものの、殿中儀式と連動して全大名が一斉に実施した年頭・八朔の御礼献上、三季の祝儀献上などの惣献上の分析が未検討であると指摘し､献上の全体構造を分析する必要を主張した。また、献上が披露される空間や担い手の差異に着目し、表向・奥向の二系統の献上ルートを設定して分類する手法を提示した。

第１章では、近世初期の元和・寛永期（1615～44）の献上を検討し、献上取次・披露の問題を通じて老中・奏者番・側衆などの職制が確立する過程を論じ、個別的な献上品は将軍の嗜好に配慮して選択され、表向ではなく奥向の空間において将軍側近らによって披露され、これが奥向における機嫌伺献上として定着すると位置づけた。また、参考史料として内閣文庫蔵「元和寛永小説」を翻刻・紹介した。第２章では、延宝期（1673～81）に対馬宗家で惣献上の格式を巡り「十万石以上格」という独自の石高表現が創出される事例を通じ、献上品とその数量が次第に石高を基準とする献上規定となって大名の序列化が進み、江戸城内における表向の体制的儀礼として大名家格の可視化に作用した経緯を検証した。

第３章では、享保７年（1722）に実施された献上改革は、主従確認行為としての再編を図るもので、表向・奥向いずれの献上をも儀礼化する画期となったことを明らかにした。とくに産物献上は国土支配を示す象徴儀礼へと昇華する一方で、奥向の献上として義務化する方針が明確になったことを指摘した点は、先行研究にはない斬新な成果である。

第４章では、享保期（1716～36）に将軍の用命を受けて「御用鷹」を献上した甲斐柳沢家の事例から、これを御用献上として概念化し、献上の新しい側面を解明した。第５章では、宝暦期（1751～64）の筑前福岡黒田家を事例として、享保献上改革以後に確立した献上の基本的構造を提示した。第６章では、長門萩毛利家における隼献上を通時的に分析し、将軍・大名間の情誼的関係を深める手段としては、依然として奥向における個別的献上行為が重視されたため、享保献上改革後には将軍側近や奥向女中を通じて実施する内献上の手続きが浮上し、盛行する経緯を論じた。

以上のように本論文は、近世武家社会における献上の全体像の解明を大きく進めたと評価できる。よって、本調査委員会は、本論文を提出した学位申請者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。